

Newsletter

2007. Jan. No. 9



つなぐ場、つなぐ技術

教養研究センター副所長 | 萩原眞一 (理工学部)

求してきた結果、私たちはいま、「多様性の多様化」の時代にいます。このまま差異意識だけが肥大していくと、ますます狭隘化の袋小路に入り込むことは、避けられそうもありません。まさにこうした事態こそが、断裂を強調することに終止符を打ち、その代わりに、異なるものの間に

聞くとところによると、認知科学の推論研究の分野では、アナロジーがさまざまな角度で注目を集めているようです。アナロジーとは、周知のように、異なるふたつ以上のものの中に同じ要素を発見する類比の方法を指します。ヨーロッパでは古代ギリシャの時代から連綿と引き継がれてきた修辞法のひとつであることは、言うまでもありません。

それにしても、いったいなぜ、一見古臭い類比の方法が現代の先端的研究分野において盛んに取り上げられるのでしょうか。答えのヒントは、最近邦訳されたバーバラ・スタフォード著『ヴィジュアル・アナロジー——つなぐ技術としての人間意識』（高山宏訳）という本が提供してくれます。

本書によれば、人と人の間にしろ、学問と学問の間にしろ、文化と文化の間にしろ、あらゆる分野、あらゆる領域において、ただひたすらつながりを絶ち、差異ばかりを追

類似を見出し、「つなぐ」技術を習得する必要性が、先端的研究分野で執拗に叫ばれている所以だと考えます。そして、どこよりもまず、「互いに不一致な複数のものものを絆で結び、互いに通訳不能なもの同士に架橋する」プロセスを回復しなければならない場所は、教育・研究を行う大学ではないでしょうか。

幸い日吉キャンパスには多分野にわたり豊富な人材が多数そろっています。しかし、6学部・諸研究機関に所属しているため、わが身を振り返ってみても、とすれば狭い枠内に閉じこもりがちです。学部横断的な組織である教養研究センターが、人と人、分野と分野の間で「通訳不能なもの同士」を自在に「つなぐ」場として少しでも機能すれば、＜不一致の一致＞が醸し出す刺激的な教育・研究の成果を社会に発信していくことができるでしょう。実際、その成果は、徐々に現われつつあります。

CONTENTS

1	巻頭言	つなぐ場、つなぐ技術
2	特集	2年目の学術フロンティア「超表象デジタル研究プロジェクト」 本研究プロジェクトの目指すものは、新たなリベラル・アーツ教育（教養教育）モデルの構築。「学びのプログラム」とそれを実施するための「学びの場」に関する研究活動の概要をフューチャー。
4	特別記事	クリスト&ジャンヌ＝クロード講演会 「梱包（パッケージ）」芸術を提起して欧米の美術界に新風を巻き起こし、現代を代表する巨匠、クリスト&ジャンヌ＝クロード。600名を超える聴衆を集め、大盛況に終わった彼らの講演会をレポート。
6	活動報告	基盤研究「身体知プロジェクト」 極東証券寄附講座「生命の教養学」と特別公開講座・生命誌ギャラリー展 「日吉キャンパス公開講座」 Hiyoshi Research Portfolio (HRP) 2006
8	インフォメーション	今後のイベント情報
8	事務局だより	変わること、変わるもの



2年目の学術フロンティア 「超表象デジタル研究」プロジェクト

リベラル・アーツ（教養教育）の新たなモデル構築を目的とする学術フロンティア「超表象デジタル研究」プロジェクトもまもなく3年計画の2年目を終えようとしています。そこで今年度の活動を中心にプロジェクトの進捗状況についてご報告したいと思います。

今年度はコンテンツ研究ユニット（教育・学習プログラムのコンテンツ開発）、学習環境構築研究ユニット（教育・学習の場を捉え直すためのキャンパス構想の策定）、超表象デジタル化研究ユニット（プロジェクト成果のデジタル化システム研究）というプロジェクトの三本柱を維持しつつ、各ユニットおよびそこに属する研究グループの活動成果を連携させることでモデルの全体像をより明確化することを

課題として、統括組織である統合研究ボードを中心にさまざまなワークショップ・実験授業を実施しました。主なものをご紹介します。

コンテンツ研究ユニット：「ワークショップ フィールドワークを考える」、「学塾としての慶應義塾1 慶應義塾入門—SFCの取り組み」、「半学半教プログラム 実験授業 奇術心理学」（2回実施）、「映画上映と講演会 エドワード・サイード OUT OF PLACE」、「模擬授業 現代中国における民族主義の諸相」

学習環境構築研究ユニット：タウンキャンパス「三田の家」の開設（9月30日オープン）、「バリアフリー



ワークショップ「フィールドワークを考える」



半学半教プログラム実験授業「奇術心理学」



タウンキャンパス「三田の家」



テクノ・キャンパス構築・中間報告

イベント一覧

2006年度後半に実施された各種イベント情報を一覧にまとめました。今後も実験授業やワークショップなど、さまざまな活動を予定していますので、ふるってご参加ください。

セミナー」(4回実施)、「高山フィールドワーク」、「都市体験とテクノキャンパス—フィールドワーク型実験授業の試み」、「ドイツ語学習支援ポータルサイト・プレゼンテーション」

なお準備中のもも含めて多くは公開形式ですので、ぜひご参加ください。

こうした活動を通して、相互につながり、さらに発展しうるプログラムのあり方が見えるようになりました。それを有機的に結びつけることが次の課題だと考えています。

超表象デジタル化研究ユニットについては、hydi (hyper digital interface) の本格運用に入ったことが特筆されます。これは主に人文・社会学系の共同研究のために開発されたもので、研究スケジュールや作業の管理、研究関連文書の共同作成、研究成果のデータベース化やアーカイブ化など、活動を総合的にサポートするシステムです。

その他、シンポジウム、海外調査、学会発表や定期的なミーティングなども重ねてきました。今後は最終年度の成果とりまとめに向けてさらに活動を充実させていきたいと考えています。これまで以上のご理解とご支援をお願いします。

(研究代表 羽田 功)

<input type="checkbox"/>	7/24 ~ 29	<国際会議>カナダ・トロント「The First Year Experience」	(横山千晶)
<input checked="" type="checkbox"/>	9/6	私立大学情報教育協会 大学教育・情報戦略大会発表 (境一三)	
<input type="checkbox"/>	9/11 ~ 13	フィールドワーク「テクノ・キャンパス」	(長田進)
<input type="checkbox"/>	9/19 ~ 20	<ゼミ合宿>ノートイク調査	(中野泰志)
<input type="checkbox"/>	9/21	ワークショップ「フィールドワークを考える」	(岩波敦子)
<input type="checkbox"/>	9/30	「三田の家」オープニング	(熊倉敬聡)
<input type="checkbox"/>	10/7	テクノ・キャンパス構築・中間報告	(武山政直・長田進)
<input type="checkbox"/>	10/15 ~ 17	<国際会議>公洲 2006「芸術と福祉」	(横山千晶)
<input type="checkbox"/>	10/18、12/1	<実験授業>奇術心理学	(小菅隼人)
<input type="checkbox"/>	10/20	<第3回バリアフリーセミナー> 軽度発達障害の世界を知る	(中野泰志)
<input type="checkbox"/>	10/26	<シンポジウム>「学術としての慶應義塾1」	(岩波敦子)
<input type="checkbox"/>	11/7	映画上映・シンポジウム 「エドワード・サイード Out of Place」	(長堀祐造・湯川武)
<input checked="" type="checkbox"/>	11/13、16	hydi 講習会	(佐藤望)
<input type="checkbox"/>	12/16	HPR <バリアフリーセミナー>軽度発達障害の世界を知る	(中野泰志)
<input checked="" type="checkbox"/>	12/16 ~ 17	研究合宿	(羽田功)
<input type="checkbox"/>	12/19	<模擬授業>現代中国における民族意識の諸相	(湯川武)
<input type="checkbox"/>	12/20	コミュニケーション・キャンパス構築・中間報告	(中山純)
<input type="checkbox"/>	'07/1/12	<第4回バリアフリーセミナー> 軽度発達障害の世界を知る	(中野泰志)

■…統合研究ボード

□…コンテンツ研究ユニット

○…学習環境構築研究ユニット

●…超表象デジタル化研究ユニット

研究成果をアーカイブする「hydi」

「超表象デジタル研究プロジェクト」では、hydi (hyper digital interface) というシステムを開発しています (<http://hydi.keio.ac.jp/index.php>)。hydi は、インターネットにつながったパソコンから文書や情報交換を行ったり、研究成果を公表したりすることのできるシステムです。hydi は、研究の開始・実施・完成公開までのプロセスを進めていけるように設計されています。とりわけ文系研究者が使いやすいように考慮しています。

共同研究のはじめから完成までをサポートするコンテンツ・マネジメント・システムは、他にあまり例がなくあらゆる研究者をつなぐ技術として成果が期待されています。(佐藤望)



クリスト & ジャンヌ＝クロード講演会

2006年10月30日（月）17時から、日吉第4校舎29番教室において、クリスト&ジャンヌ＝クロードの講演会が開催されました。この企画は、先年開かれた「世界アーティストサミット」の関連プログラムとして、京都造形芸術大学（特に副学長で日本画家の千住博氏の懇意による）との協力によって実現したもので、慶應義塾大学側ではアート・センターに協力を仰ぎつつ、教養研究センターがビデオ上映会など啓蒙的な周辺行事をも含めてその具体化に努めました。

クリスト&ジャンヌ＝クロードといえば、60年代初頭から公共建造物などを包み込む、いわゆる「梱包（パッケージ）」芸術を提起して欧米の美術界に新風を巻き起こし、以来半世紀近くにわたって、世界各地の歴史的記念建造物や広大な自然景観に対して、膨大な時間と費用を投じた「エクスポジション」を展開して、未だその芸術行為への執念の衰えることのない、まさにわれわれ同時代を代表する巨匠といえます。日本でも1991年10月に常陸太田市周辺の谷地に、直径8.66メートルの青色の傘を1340本も立て込むという、途方もない展覧行為を遂行して私たちに驚かせました。

当日は、会場前に長蛇の列ができるほどの盛況で、立ち見を含めて600名収容の29番教室は早々と満杯になりました。収容しきれない人々のために、来往舎のシンポジウムスペースをあらかじめ用意してありましたが、そこにも



熱心な聴衆が集まりました。この種の講演会にこれほどの参加者を得たということは例外的でもあり、とりわけ、学生をはじめとする若い聴衆が大半を占めたのは今回が初めてでしょう。

講演会はまず主催者を代表する横山千晶教養研究センター所長の英語による挨拶で始まりました。予定ではこのあと、千住博氏から一言お話をいただくことになっていましたが、所長挨拶が終わるやいなやすぐさまジャンヌ＝クロードがマイクを取り「みなさんこんにちわ」と口を切りました。見事なつかみでした。そのあとは一気に、偕老同穴のご両人による巧みな話術と、両氏と親しい美術評論家の柳正彦氏の流暢なその通訳に引き込まれていきました。

スライドを用いた両氏のお話は、これまでの芸術行為のプロセスと現在進行中の《オーヴァー・ザ・リヴァー、コロラド州、アーカンサス川のプロジェクト》に関する最新のプレゼンが骨子になっていました。両人の芸術行為は、そのアイデアに始まってエスキス、具体的なプランニング、調査、行政当局との折衝、資材と人材の調達、実地作業、完成、展覧、撤収と、実に遠大なプロセスを要します。その過程の総体が彼らの芸術行為なのです。現実風景の中に彼らの営為の結果が忽然と出現するのに四半世紀を要することもあり、しかもその展覧は蜻蛉の命、総じて2～3週間です。その後は、跡形もなく自らの手で取り壊し夢の如く消滅せしめてしまいます。かくも膨大な時間と費用・労力をつぎ込みながらもその残骸さえも消し去ってしまう芸術とは？ 後半に用意された質疑応答コーナーでは、引きも切らない質問が出ました。彼らの芸術行為に対する驚きと率直な疑問で精神が揺さぶられた証ではないでしょうか。二人は、自分たちの芸術行為は、何のためでも誰のためでもなく、おのれの抱く夢の実現にのみその目的があると、意気軒昂に答えていたのが印象的でした。

その後のファカルティラウンジでの懇親会では、お二人を幾重にも囲む若者の輪ができ歓談に花を咲かせました。今回の企画の成功を確信できる情景でした。（木俣 章）

千住博氏によるプレ・レクチャー

「芸術とは何か？」 ——クリスト&ジャンヌ＝クロードの魅力」

その日は午後からぐっと気温が下がり、まだ10月というのに足もとから冷気が伝わってきた。それでも定刻を待たずに席は埋まり、来賓舎イベントテラスには静かな熱気が集まっていた。目の前には、その場で制作されるという何も描かれていないキャンバスがあった。

この催しはクリスト&ジャンヌ＝クロード講演会のプレ・レクチャーとして企画されたものだ。ところが投光器の光をうけて語りはじめた千住博氏は、彼らについてすぐに触れることはせず、「芸術とは何か？」を説きあかすのにたっぷり時間をかけた。重たい美学談義に深入りしそうなこの問いも、千住氏にかかる、軽やかな、生命感にみちた呼びかけになる。もちろん、芸術の営みのなかには困難も、挫折も、不幸だってある。それでもすべてを乗り越える強靱なすこやかさを信じようという気にさせられるのだ。芸術とは思いを伝えようとする行為そのもの、と千住氏はいう。また、芸術とは全方向に開かれたコミュニケーション、とも。このことばが説得力をもつのは、塾員で



ある千住氏自身、こうして後輩たちに語りかけることを全身全霊で楽しんでいるのが見てとれるからだ。つまりこの機会も千住氏にとって芸術行為にほかならなかったのである。そしてそれと呼応するように、エアブラシを手渡された3名の塾生が最初のタッチを残したキャンバスに、千住氏はときおり、真剣に、周到に手を入れてゆく。

話題がようやくクリスト&ジャンヌ＝クロードに及んだのは、この共同作業の《滝》が完成に近づくころだった。プロジェクトの資金を作る努力も、自治体や地権者相手の説明会も、すべてを含めて彼らの芸術行為であることが語られたとき、私たちはすでに千住氏のみごとな術中にあっただけか、芸術を囲う境界線はいつのまにか取り払われていたのである。

クリスト&ジャンヌ＝クロードの講演会にむけて、千住博氏は最良の方法で私たちの目と耳の錆びを落としてくださった。心よりお礼申し上げたい。(笠井裕之)

クリスト & ジャンヌ＝クロード講演会企画を振り返って

IT化が進み、生活のスピードが加速し、生の声や生の身体を通しての対話だけが「話し合い」を意味しなくなってきた昨今、「語りかける」ことの意義を、芸術を通して見直してみる。はからずも今回の企画は、始めから終わりまでこの「語りかける」ことを究めた感がある。千住博氏は2006年の春に、若い人々の集まる日吉キャンパスで、この講演会を行う意味を電話で話してくれた。教養研究センターでは、この講演会の教育的な目標をコーディネーターと企画担当所員の間で、そしてアート・センターのメンバーとの間で語り合った。京都造形芸術大学の講演企画担当者とはメールだけではなく、電

話で、そして京都と東京を実際に行き来することで企画を進めた。ふたりを日吉に迎える前には千住博氏が日吉を訪れ、芸術と創作の生活の中での意味と、クリスト&ジャンヌ＝クロードのインパクトを学生に語りかけた。そして講演当日、クリスト&ジャンヌ＝クロードは自分たちを突き動かす創作活動への意思と衝動を600名以上の聴衆にまさに語って聞かせたのである。考えてみれば、彼らの芸術活動は、企画し、その意義を面と向かって人々に語ることで納得してもらい、続いて人々を丸ごとその中に巻き込むというプロセスすべてにほかならない。期間限定で跡形もなくなるクリスト&ジャンヌ＝



クロードの作品は、経験し、見た人々が「語り継ぐ」ことで生きていく。私たちはこの企画を通して、クリスト&ジャンヌ＝クロードの創作活動の源をまさに経験していた。そんな気がしてならない。(横山千晶)

基盤研究「身体知プロジェクト」

基盤研究「身体知プロジェクト」は、肉体としての身体のみならず、精神や感情などを含めた存在としての個を中心に、どのような「知」を展開できるかを理論と実践の面から考慮する研究プロジェクトとして、2005年に発足しました。2006年秋学期「体をひらく、心をひらく ― 新しい実験授業へようこそ」を開始。全8回のうち5回を終え、手ごたえを感じています。記録者、観察者、ビデオを配しての授業展開は、今後の検証が楽しみです。授業目的は、固く疎遠状態の体と心を啓き繋ぎ、気づきと生き生きとした自分感覚を取り戻す場の提供です。呼吸法、コラージュと連句、ムーブメント等、身体とイメージを用いるコンテンツを、外部講師のもと、参加型のプロセスで学びます。緊張と戸惑いから発出した場合は、さまざまな自分を表現、触れ向き

あい、他者と言語、非言語レベルで互いにサポート、触発、さらには牽制、反発も許容する場に育ってきました。

学部生、教職員、小学校教員等、多様な人間達の生むエネルギーは時に爆発します。模造紙をはりあわせた巨大台紙に、新聞、雑誌、広告等から好きな素材を切り取り張っていきました。すると平面だけでなく、建物が立ち上がり、飛行機が飛び、花が咲くという大パノラマが、グループ・コラージュの授業では出現。

各セッションでは、感想を書く、言うという振り返りの時間があり、体験を味わいつつ、言語化も促されます。自分の気持ち、体とのつきあい方、行動のくせ、人のかかわり方など、思わぬ気づきももたらされます。授業の大事なメタ・プロセスです。

本プロジェクトのもうひとつの柱、研究

会では、秋に実験授業の外部講師を招いての研究会を催しました。授業の振り返りをさらに深め、このメタ・プロセスの功罪や意味を議論し、各講師の専門性と実践からの知恵を学び、どう身体知教育に活かしていくのか活発な議論を展開しました。本年度後半には、本実験授業の検証を深め、身体知教育の理論化に備えたいと考えています。 (手塚千鶴子)



極東証券寄附講座「生命の教養学」と特別公開講座・生命誌ギャラリー展

今年の『生命の教養学』は【生命を見る・観る・診る】というサブタイトルで生命を異なるレベルで見つめてみようという企画でした。私たちはどうやって見ているのか？ 観ることから、どういうことがわかるか？ またそこにはみせる工夫と歴史もある。ひたすら見ることに努めた先に観えてきた、私たちの細胞が生まれてきた謎をはじめ、自然界の思いがけな

い現象たち。そして命を診る。命と向き合うことを職業としている講師のお話から命の尊さを感じ取り、森から川、海へと連なる命に思いを馳せるきっかけもありました。このように能動的にみようとすることで物事はみえてくるのだということ学びました。

これと連携して、独自の生命観の発信に尽力されている大阪高槻のJT生命誌研究館中村桂子館長の特別公開講座、および生命誌研究館の出張展示と教養研究センターの活動を紹介するギャラリー展を行いました。公開講座では、伊藤若冲の『池辺楽園』という作品の中に描きこまれている多くの生き物たちの生き生きとした姿を一般の方々とも一緒に観つめ、自然とのかかわり方について考えることができました。

8月のギャラリー展は一般学生が参加しにくい時期でしたが、通信教育スクーリングやオープンキャンパス参加者の来場があり、初めての試みではありましたが、実質開催18日の間に500名を超える方が観ていただきました。

当講座では『生命の教養学』の本の出版も行っています。本年は一昨年の講座「僕らはみんな進化する」が出されました。今年の講義内容は来年度出版される予定です。

ともにコーディネーターを務めてくださった、石原先生と武藤先生、事務方、展示を工夫して「毎日進化する展覧会」にしてくれたバイトの学生たちなど多くの助けを得ての今年の『生命の教養学』でした。ありがとうございました。

(中島陽子)



「日吉キャンパス公開講座」

2006年度のテーマは、「自然と科学と人間」。その主旨は、人間が営々として築いてきた自然科学の成果、その成果の社会的意義に関する功罪両面からの論議など、多面的な観点から光を当てることにありました。コーディネーターのひとりである表實商学部教授によって、慶應義塾と自然科学との関係性の講義から始まり、西村顕治氏の「生物濃縮」の話、師と仰ぐ湯川秀樹・朝永振一郎の学説と社会的な貢献について語る小沼通二氏、階層生物学を提唱する団まりな氏、ベルナル実験医学の非人間性を説く林田愛氏、パラドックスを数式で証明する竹中淑子氏、フランス革命時代の天文学者を紹介された石原あえか氏、ヨーロッパ啓蒙時代における吸血鬼論議を語るフィリップ・コミネッティ氏、数学史的な観点から文

化と社会を語られた渡部睦夫氏、植物は光が好きかに関する2学説について開陳した小瀬村誠治氏、自然を経験されたままに記述するゲーテ的自然学を唱える増田直衛氏、江戸時代の天文学とプラネタリウムについて解説された児玉光義氏、生物化学から見た科学の楽しみを示された秋山豊子氏、哲学的人間学の視点から人間について考察する樽井正義氏、雷をめぐる神話的人物と科学者について語る小淵昭夫、そして占いや超能力といった疑似科学を疑い、切っていく下村裕氏といった具合で、一言では言い尽くせませんが、豊富な内容の公開講座でした。応募者数265名、うち参加者241名、平均年齢60.1歳（最高齢86歳、最



年少19歳）、性別比では男性150名、女性88名でした。平均出席率は、182名、75.2%前後でした。修了証受領者（6回以上出席）は、207名（85.5%）、全回出席者も55名（22.7%）いました。

（小淵昭夫）

Hiyoshi Research Portfolio (HRP) 2006

12月15・16・18日の3日間にわたり、日吉キャンパスの来往舎においてHRP 2006が開催されました。教養研究センター「調査・研究セクション」は、ポスター展示に出展し、主に2005年度後半から2006年度にかけての活動について発表を行いました。

各ポスターのタイトルと概要は次の通りです。①教養研究センターにおける研

究活動とその成果：新しい教養・教養教育モデルの創出、新たな知の創出というセンターのミッションと主な研究活動を紹介、②調査・研究セクションの活動、③国外調査：韓国のソウル国立大学校、成均館大学校、延世大学校における教養教育およびオーストラリアのシドニー大学、ニューサウス・ウェールズ大学における自然科学を中心とした教育システムなどを紹介し、国外高等教育機関の教育の現状を報告、④国内調査：1997年より全学カリキュラム運営センターが全学共通カリキュラムを運営している立教大学を対象とし、センター組織、実施経過、実態、諸課題などを紹介、⑤公開授業：相互に講義・授業の工夫を披露し、理解を深めながら、共に教育の方法・

内容の向上を目指す取り組みを紹介、⑥The First-Year Experienceへの参加：大学1年生が高等教育にスムーズに適応していくためのプログラムや戦略について論議する国際会議において、研究発表やディスカッションを行ったことを報告。

その他、16日には「軽度発達障害の理解と支援—大学での支援の実際と高校や企業との橋渡し」（平成17年度文部科学省学術フロンティア推進事業 バリアフリーキャンパス構築プロジェクト）および「日吉キャンパス タウンミーティング」（開かれゆくキャンパスシリーズ）のふたつのシンポジウムを開催しました。教養研究センターでは、HRPなどの発表の場を活用しながら、今後も研究活動を積極的に発信していきたいと考えています。

（萩原真一）



一貫教育の冒険②

— 幼稚舎生から卒業生までが『福沢諭吉の手紙』を朗読する —

交流連携セクションでは、塾の一貫教育の新たな可能性を探るために、「一貫教育の冒険」というシリーズを昨年度から始めました。第一回は、「一貫教育の冒険① 平家物語群読会」と題して、幼稚舎・普通部・女子高校・志木高校の生徒、そして大学生にご参加いただき、壇ノ浦の合戦の名場面を感動的な舞台に作り上げました。

今年度も、古典の朗読を通して、一貫教育のさらなる可能性を探っていきたくて考えています。今回取り上げるテキストは『福沢諭吉の手紙』(岩波文庫版)です。今回の朗読会では、一貫教育校全校と大学、さらには卒業生にも参加を呼びかけ、より大きな規模で塾生・塾員間のコラボレーションを展開していきたいと考えています。

■日時 2007年2月4日(日)(福沢先生命日翌日)
13:30 開場 14:00 開演 15:00 終演(予定)

■場所 幼稚舎自尊館(予定)

■主催 教養研究センター

■協力 速水淳子(志木高校)、鈴木秀樹(幼稚舎)

(熊倉敬聡)

「教養研究センター選書」の 審査結果

「教養研究センター選書」は教養研究センター所員・研究員の先端的な研究活動を、学生や一般読者にわかりやすく紹介するために刊行されています。第4回目の公募となる今年度は3件の応募がありました。厳正なる審査の結果、常山菜穂子法学部助教授の「アンクル・トムとメロドラマ——19世紀アメリカにおける演劇・人種・奴隷制」(仮題)が採択されました。この選書は3月末に刊行予定です。

(横山千晶)

FDセミナー グンブレヒト教授講演会

スタンフォード大学における教養教育の取り組み

2007年3月13日午後2時より、来往舎1階シンポジウムスペースにおいて、スタンフォード大学ハンス・ユルリッヒ・グンブレヒト教授によるリベラル・アーツについての講演会を行います。研究機関として全米トップクラスに位置するスタンフォードは、また学部生のリベラル・アーツ教育プロジェクトにも近年重点をおいています。教育・研究業績の両面において、多言語にわたり人文科学を広くカバーするグンブレヒト先生は、そんなスタンフォード大学を代表する教員のひとり、アメリカ大陸とヨーロッパ世界を往還する碩学の一人と言えるでしょう。講演の名手としても知られるグンブレヒト先生に、今回の講演では21世紀におけるリベラル・アーツ教育を積極的に実践するスタンフォード大学において、そして先生ご自身にとって、リベラル・アーツとは何かを主題にお話しいただく予定です。先生方のみならず学生諸君もぜひ聴きにきてください。(石井康史)

極東証券寄附講座「アカデミック・スキルズ」 プレゼンテーション・コンペティション開催

本年度の極東証券寄附講座「アカデミック・スキルズ」は、およそ60名の学生を対象に3クラスが開講されました。アカデミック・スキルズの構築のみならず、学部を超えたつながりは、これからの大学生活の中で大きな財産となるでしょう。本年度も2007年2月8日(木)にプレゼンテーション・コンペティションを開催します。それぞれのクラスから選ばれた代表者がリサーチ、プレゼンテーション能力を競い合うこの場合は、いままで培われた知の探求能力のみならず、学生の横と縦のつながりが遺憾なく発揮される一日となることでしょう。多くの方々のご来場をお待ちしています。(横山千晶)

「事務局だより」変わること、変わらぬもの

「2002年の開設以来〇〇年を経て」という言い方が、当センターを紹介する文面に使われて久しい。しかし、決まり文句のようにこの言葉を使うのは、もう当たらないのかもしれない。すでにその活動は着実に成果を積み重ね、その範囲は広がり、かつ深化して、確固たる研究センターの態を成すに至った。

文部科学省学術フロンティア「超表象デジタル研究センター」構想から生れた教養研究セン

ターは、息づく間もなくひた走る。その方針を論ずるときによく言われる。「片足で行方を探りながら、もう一方の足でペダルをこぐ」、と。進まなければ倒れる。「進む」ことは「在る」ことに等しい。

しかし当然、進む意義と方向は常に問い続けられなくてはならない。そこで判断の基準となるのは、地味な記録なのかもしれない。研究の意欲と想念の基礎となるのは、こつこつと書き

上げられた研究活動報告であり、アンケートの集計であり、諸会議の記録であろう。研究を進めるのは、現実とその観察から生れる知見でなければならない。

研究者の要求に応えながら、つねに基本を確かめ、基本そのものを磨き、活動の実態を理解し易く備える。事務職員が存在理由のひとつは、このあたりにあるとも言えるだろうか。

(甲賀崇司)